



TITLE:

孟森氏に答ふ：ヌルハチ七大恨論に
關して

AUTHOR(S):

今西, 春秋

CITATION:

今西, 春秋. 孟森氏に答ふ：ヌルハチ七大恨論に關して. 東洋史研究
1936, 1(5): 477-484

ISSUE DATE:

1936-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138699>

RIGHT:

孟森氏に答ふ

——ヌルハチ七大恨論に關して——

今 西 春 秋

本誌前號に私は「ヌルハチ七大恨論」と題して、清の太祖努爾哈赤の七大恨書に關する孟森、鴛淵兩先生の所論、就中孟森氏の所論に對し若干異見の存する所を以て質した處、孟氏は早速、五月十四日付天津益世報讀書週刊誌上に「關於清太祖告天七大恨眞本研究答日本今西春秋氏」と題して、私の異見所論の未だ賛同に當らないものである旨を答へられた。然るに孟氏の答論には遺憾乍ら曩に私の論じた所を以て寸毫正當に了解して頂けたと思はれるものを見ない。従つて更に茲に私の孟氏に答へんとするところのものは、たゞ前號の卑説を繰返す程のものに過ぎな

いのだが、讀者幸ひに私と孟氏とのため之を諒とせられよ。

孟氏先づ今西說を概要し論を進めて曰く 滿文老檔所載、天聰元年太宗與袁崇煥書中に見ゆる七大恨項目は東華錄同條所載のものと正に相同じであるが、老檔は天聰元年の文件であるから、天聰四年の木刻勝文に較べて更に天命三年七大恨原本に近いわけである。(今西曰、孟氏は文中全て四年とせられたが、之は天命三年四月とすべきで、孟氏の思ひ違ひであらうから今凡て天命三年) 故に勝文を以て眞本に近しとするは、天聰元年の滿文老檔を以て眞本に近しとするに如かな

いといふのが、今西の説であるが、自分は未だ敢て賛同しない。勝文は乃ち當時關の内外軍民に告げしもので、今に至つても仍ほ是原件である。然るに檔案は是隨時整理したものであつて、記する所の天聰元年の記事が天聰元年の原文であるとは言はれない。

今西曰く 劈頭孟氏の誤解がある。氏の指さるゝが如きは毫も私の説く所でない。老檔が天聰元年の文件そのものであるといふ様なことからして、私は何處にも述べてはゐない。天聰元年作制の七大恨文といふ言葉は使用したけれ共(24前號頁數以下做之)、之が七大恨文が天聰元年當時の姿を傳へてゐるといふ意に他ならないことは、別に木刻勝文が天聰四年當時の原件に相違ないことを私だとして確認して、「蓋し本文(勝文)が天聰四年當時の儘のものであることが、木刻揭勝のかたちに於いて遺存してゐる點から又……何等疑ひの餘地を

存しないであらう。この點に於いては確かに實錄より古く、又更に滿文老檔の編纂以前に出来たものであるかも知れない。然しこのことは、老檔なり實錄なりの傳ふる内容が、この木刻文よりは新しい、この木刻文よりは原狀に遠いものであるといふことには毫もならない。(22)と記したことを讀んで頂いただけでも分る筈ではあるまいか。内容そのものの新古と、文件そのものの新古といふことが明瞭に別個の問題であることはさらに贅言するまでもない。

然らば何故に滿文老檔天聰元年の條所載の七大恨文を以て、天聰元年作制當時の原形を傳ふるもの、略言すれば天聰元年作制の七大恨文であるといふかと云ふに、之は専らに老檔の記事の紛飾改竄なきを信することによるものである。その紛飾改竄なきを信する理由はと言へば、老檔中には *jusen gunun* とか *aisin gunun* などの文字も刻明に

殘されてゐること、太祖の弟舒爾哈赤同長子褚宴の幽殺等、實錄では明らかに忌避されたと思はれる記事も忠實詳細に描寫されてゐること、老檔全文に亘つて極めて粗野質朴に叙述されてゐることなどを見るからである。が更にこの確信を得しめたものは、今現に問題にしつゝある所の七大恨文の検討によつてである。私は太祖老檔天命三年四月の條に掲げられてゐる七大恨文を明實錄同年月の條所載の七大恨文と對比検討して、その天命三年四月當時の原形を傳ふるに相違ないものであること、つまり老檔に改竄なき例證を一個増加し得るものであることを看取した(而して實はこのことこそ卑説の中心であり、更に後段論ずる所である。)滿文老檔の如くあるを見て、私は天聰元年の條所載の七大恨文は又天聰元年當時の形を傳ふるものであらうといふのである。然しこの方は假令ひ、天聰元年當時の姿を傳へてゐるものでなく

ても尙私の總結論には差し支へない筈である。何故なれば、私は滿文老檔天聰元年の條所載の七大恨文は、天聰四年の木刻勝文に似てゐる(23 24)といふまでであつて、これが勝文に較べて一層天命三年當時の原本に近いものであるなどは、さらに論ずる所ないからである。私の論じた處は、太祖老檔天命三年の條所載の七大恨文は、それ自體、太祖が掲げた當時の七大恨文であり、太宗老檔天聰元年の條の七大恨文は又それ自體、太宗の掲げた當時の七大恨文である。更に尙天聰四年の木刻勝文は、それ自體その當時の恨文に他ならないといふのであつて、何れが七大恨文の原文であるなどといふのではない。強ひて七大恨文の原本などといふものを求めるならば、何れも夫々その夫々の時の原本であるといふ他ないのである。そこで假令ひ、天聰元年のものだけが、當時の原本でないにしても、尙天命三年の條所載のものは、そ

の當時の原本（そのものであるとは言ひ得ないにしても、それに最も近いもの、尠くとも木刻勝文などよりは遙かに近いもの）であることを、明實錄との比較検討によつて明瞭ならしめ得るつまり、孟氏の如く天命三年當時の原形と言ひ得なければ、それに最も近い形を求めるならば、それは老檔天命三年の條記載のもの以外に無いといふのが私の論旨である。天命の七大恨は太祖の七大恨、天聰の七大恨は太宗の七大恨と夫々別個のものであり、之を七大恨の形は或る一個の形、即ち凡て太祖天命三年當時の形に歸せられねばならぬなどとする孟氏の考へ方は大きな誤謬を犯せるものである。私の論旨に對する誤解も、かういふ考へ方を先入感にして出發せられたことに基因するものに他ならないであらう。私は前にも明瞭に斷言してゐる。「要するに、太祖の告天七大恨は滿文老檔天命三年四月十六日の條に見ゆるものであつて

太宗の天聰四年木刻揭勝七大恨が太祖時の原文を示すものでも何でも無い。但し太宗の木刻文も、それはそれで太宗の掲げた七大恨眞本である、太祖の掲げた所、太宗の掲げた所、各々夫々に相違があるのであつて、これを七大恨の形は或る一個に歸せられねばならないとの漠然とした考へから論を進めた所に孟氏の根本的な誤りがあるのである。」と。（26）

而して尙こゝに述べておき度いことは、老檔天聰元年の條の七大恨文が、天聰四年の木刻七大恨文に相似してゐるといふことは、實に老檔天聰元年の條の七大恨文が當時の原形を示してゐることの有力な證據となるものに他なるまいといふことである。已に木刻七大恨文を以て天聰四年當時の眞本と見ることは誰しも異論なかる可き筈である。この明確に眞本である所のものに相似してゐるといふことは決して偶然のことではない。前述するが如き、老

檔の忠實な記録である例證をこゝに更に添加するものである。天聰元年と天聰四年と、同じくこれ太宗の時であつて、且つ其の間三年を隔つるに過ぎない。天聰元年の七大恨文が天命三年の七大恨文に似るよりも一層天聰四年の七大恨文に似てゐることは寧ろ當然であり、而してその當然のことこそは、老檔の信據し得べき度合ひを更に揚め天聰元年の七大恨文にも格別の改變はなかつたであらうことを語る結果に到らねばなるまい。

以上私の指して老檔と略稱する所のものは、乾隆末年の重鈔を経た所謂滿文老檔なるものゝ謂ひに他ならないものであることは、言ふ迄もないのだがこの重鈔が原老檔に就いて極めて忠實に行はれたものであらうことは（尠くとも當面の問題の立論には差し支へなく）私の就いて上述するが如き重鈔本老檔の内容に見て明らかなものがあらう。而して原老檔現存の天命天聰の部

分は無圈點文字で書かれてゐるからには、それは有圈點文字の發明ありし以前、即ち天聰六年以前の作製になるものであると考へられねばならないであらう。即ち私は滿文老檔（崇徳の分は除く）の作製年時を以て、天聰元年であるとはしないが、大體に於いて天聰六年以前の作に係はるものであらうとするのである。（尙滿文老檔の編纂に關し、ては史林第二十卷第三四號に掲載の專説「清三朝實錄の纂修」中に説く所を参照あり度い）

孟氏續いて老檔の編纂年時を論じて曰く、老檔中現に滿洲國皇帝致袁巡撫云々など滿洲の稱號の見ゆるは、老檔の整理が最初の太祖實錄編纂以後、即ち天聰九年十月以後にあることを示すものである。但しこの滿洲の稱號は金梁の譯文に據るもので、鴛淵先生の與袁巡撫書の譯文には首數行が譯されてゐないから、實際老檔には何とあるのか分らないが、若しこれが女眞となつてゐたら、それ

は老檔が實錄編纂以前即ち天聰九年十月以前に整理されたことを示すものである。然し何れにしても天聰元年の原檔其物で無い點には分ち無いのであつて、如しこれが天聰元年の原檔であつたならば、應に木牌に作られてゐた筈である。紙墨の寫本ではないのである。

今西曰く、孟氏は袁崇煥に與ふる書中の滿洲國皇帝云々の冒頭の字句に就きさきには一概に金梁氏の譯文の不都合を説いて、老檔にかゝる字句の存在する筈がない、必ずや金國汗云々とあつたであらうと責めておき乍ら、今度は較々勝手に説を變へて（自説に都合よい様に）若し如斯く已に滿洲の稱號が見ゆるならば、それは老檔が天聰九年十月以後に出來たことを示すものに他ならない、若し又女眞となつてゐて金梁が勝手に改譯したものならば、それは老檔が九年十月以前に出來たことを示すものだから、鴛淵先生の譯文に

この邊り數行の文句を缺くことを述べられたのである。鴛淵先生の譯文に冒頭數行の譯文を缺くことは事實だが、然しそのために私は自ら老檔を閲し、この滿洲國皇帝云々に相當するところには、ちゃんと *aisin gurun i han*……となつてゐることを記しておいた（32）願くば孟氏、かゝる答論を長々とされる前に、今少し綿密に私の記した所を讀んで頂き度かつた。女眞となつてゐたならばの誤記かどうかは知らないが、女眞といふ字ならば鴛淵先生の該譯文中に二三個ならず出てゐる。何のために女眞となつてゐたならばなどと云はれたのかも私には了解し難い。又言つておき度いことは、假令ひ滿洲の字を寫す文字が老檔中に見えるからとて（右の場合は金國となつてゐるが）それを以て老檔の作製が天聰九年十月以後にあると斷じ去ることは出來まいかと思はれることである。かういふ斷

定は、滿洲の稱號が實錄編纂時の制作に係はるとする獨斷論から出發する。滿文老檔而も無圈點文字の滿文原檔に *manju gurun* の稱號は見えてゐると聞く。如斯き點を如何に解釋するか。幸ひに孟氏はこの種の資料を思ふが儘に使用し得る立場にある人である。切に明快な解釋を呈示せられんことを仰望する。

次に又孟氏に質し度い。假りに原老檔が、天聰元年のものであるとは言はないが、天聰元年のものであるとしてそれは何故に木牌であらねばならないのか。私にはその理由が不明である。建州が最もその缺乏に苦しんだ所のものが紙と鐵とであつたことは事實であらうが、然し天聰元年當時の記録ならば木牌であらねばならぬといふ理由はないかと思ふ。當時、明や朝鮮に送つた文書が木牌であつたといふ様な特殊な記録は何處にも見當らないのみならず、立派に紙に認められたものである

ことは、試みに「明清史料」所載の數個の檔案に就いて見らるゝもよい。原老檔は高麗箋の裏面や明代の公文書やなど、一種の反古紙を利用して認めたものであるが、然しそれは紙の缺乏してゐたことを示すだけのことであり、又却つて、かういふ種類の紙を使用し得たことを語るものに他ならないであらう。

孟氏又木刻勝文中特に蕭伯芝の一項に言及して曰く 蕭伯芝が建州に來たのは乃ち萬曆四十二年甲寅四月のことである。四十六年の太祖の七大恨條目には偶々この近事を數へ擧げたもので、もとより事の輕重を甚だしくは考へたわけでなく、一時草々の文に過ぎなかつた。これより十一年を距てゝ天聰四年である。當時見た所のものは十一年前の七大恨書である。故に十一年前即ち天命四年當時の原文にあつた蕭伯芝の一款が、天聰四年の七大恨書に入つてゐるの

である。乃ち此の時未だ七大恨書を改竄するに暇なかつたものである。其の後、實錄を修むる時に際して老檔をも改定し、七大恨文にも潤色を加へた。故に若し天聰元年に七大恨文を定め、四年の木刻勝文には反つて多年前の重要でないことを加へたといふならば、これ全く事理を失したものであること論ずる迄もない。

乃ち自分は四年の勝文を以て眞本に近いものであるとする所以である。今西曰く 私をして言はしむるならば孟氏の所論こそ事理を失したものと云ふの他ない。孟氏の論の如きは全く勝文を以て、天命三年の眞本であるとする盲信の上のみ成立するものである。孟氏は勝文第七恨目の蕭伯芝來建州の一條を以て特別の個條の如く考へてゐるけれ共、之が實は他の七大恨文では「葉赫の言を信じ人を遣はして惡言云々」となつてゐるものに他ならないことも已に前號に詳論した。(24—26)即

ち私の論旨では、天命三年、天聰元年の七大恨文では「葉赫の言を信じ人を遣はし云々」のこの人を、天聰四年の木刻勝文では、明瞭に蕭伯芝であると示したものであるとする。前の七大恨文に蕭伯芝と書いてなかつたからとてこの人名を挿入するに困らないだけの資料の存したことは、滿文老檔太祖甲寅の年四月の條に「漢の萬曆汗彼の蕭禦官を遣はし云々」とある(24)に見ても推察に難くない。故に天聰元年已に七大恨文を定めたなど、妙なことは私は言はないが、若し四年の木刻勝文には反つて多年前の重要でないことを加へたと言つても(事實こんな言ひ方はしなかつたけれども)毫も事理を失することにはならない。

孟氏又明實錄所載の七大恨文を参照するに及ばざりし理由を辯じて曰く今西は又自分の七大恨研究が多くは清代漢文記録に依據して、滿文老檔に及ばず、且又明實錄を注意しな

つたといふれ共、今西掲ぐる所の滿文を見れば特に漢文と異なる所を見ない、滿文も亦後改文であること論に及ばない。明實錄の七大恨文に至つては簡略已に甚しく、文憤怒の意を帶び、以て小夷の無禮を表示するものに過ぎない。自分は原と七大恨

の眞本が孰れであるかを研究するを以て目的としたが故に、七條詳文あるものを採つて比較したのであつて明實錄は自分が蒐集した所の資料と甚だ相關しないものであつた。我が題目の意は鴛淵戸田兩氏の著はす所と同じでないが故に未だ敢て合轍を盡さなかつたまでである。

今西曰く掲ぐる所の滿文が漢文と異なるなきは、七大恨に關する限り漢文にも亦改變のなかつたことを示すものに他ならないのであつて、孟氏の所論は正に前後を顛倒したものである。實錄に就いても老檔に就いても凡てを色眼鏡で對してしまつた結果は、凡そ如

斯きにまで到る。而して簡略用なしと片付けてしまはれた明實錄の記事こそ孟氏研究題目の意には必要不可欠のものであつたので、鴛淵先生の所著に缺くるは、この方の研究題目の意に見れば、寧ろ許されても爾る可きものであつたのである。

私は明實錄萬曆四十六年四月の條所收の七大恨文が老檔天命三年四月の條所載の七大恨文と、その内容、その項目順序盡く一致するものであることを述べ、(19)このことの最も注意せられなければならない理由として、「滿文老檔と明實錄とは、編纂上相互の間に何等の關係も無く、兩者夫々全く別個に傳へられた記録である。全く別個に傳へられた記録が一致するといふことは兩記錄何れにも改變のなかつたことを示すものに他ならない。換言すれば、この場合、明實錄の記載によつて滿文老檔所記の確實にして改作なかつたことを裏書きし、又滿文老檔の所記によ

つて、明實錄の記事の夷文に忠實であつたことを知るものである」と論じた(20)萬曆四十六年四月、明に齎^{もち}られた儘、清朝の記録とは何等の交渉を持たなかつた明實錄七宗恨の記事が、假令ひ簡略化されたものとはいへ、その内容、その項目順序、清朝所傳の天命三年の七宗恨に一致するといふことは決して偶然にして見られることではない。今一度説述の便のため明實錄所載の七大恨文を條記することを許され度い。

- 一、朝廷無故。殺父其祖。
- 二、盟背發兵出關。以護北關。
- 三、豐陽。清河漢人出邊。打礦打獵殺其夷人。

四、又助北關。將二十年前定的之女兒。改嫁西虜。

五、三岔。柴河。撫安。諸夷隣邊住牧。不容收未。

六、過聽北關之言道。他不是。
七、又西關被他得了。反助南關。逼

説退還。後被北關搶去。

願くば孟氏、右七大恨文を以て簡略見るに足らずと一蹴せず、今一度仔細に太祖天命三年の七大恨文と比較し、その内容の如何に相似たるか、その項目次序の如何に同じきかを知り、然る後之を太宗天聰四年の木刻七大恨文と比較して、先づその項目次序の如何に相違するかを見られよ。木刻文に於いては、必ずや右七大恨の次第の順次(一)(七)(三)(二)(四)(五)(六)となり、而も其の内容に至つては、老檔恨文の相近きとは遙かに異なるものあるを容易に看取されるであらうが、特に右第六恨の如き、之を滿文老檔に就いて見れば、「境外の天の非としたる葉赫の言を取りて惡言言ふために書を書きて人を遣はして我を種々の恨書き辱しめたり」とあつて、兩間の間殆んど差異あるを見ないにも拘はらず、木刻勝文の本條に相當のものとしては例の蕭伯芝の一條「我國素順。並不曾稍倪不軌

忽遣備禦蕭伯芝。蟒衣玉帶。大作威福穢言惡語。百般欺辱。文□之間。毒不堪受」が擧げられ、老檔の恨文と木刻勝文の恨文と何れが明に傳はり明實錄所傳の恨文となつて現はれたものか、今更改めて説くを要しないであらう。若し孟氏説くが如く、木刻勝文を以て天命三年當時の形を傳へて最も近いものであるとするならば、明實錄所載の右七大恨文を以て如何に解釋するか、私の最も孟氏に問はんと欲するところである。

以上を以て大略孟氏に答へ得たかと思ふ。たゞ不文の致す所、論じて達せざるあるかを恐れ、切に大方の叱正と批判とに仰望したい。

尙、本誌前號に三國谷氏の掲出せられた撫近門扁額の寫眞に就き、孟氏は右答論に付し、併せて本研究會宛質されし所あるを以てこゝに私よりお答へしておき度い。孟氏の質さるゝ所は、

「撫近門扁額拓本の寫眞を見るに、その兩側に漢文の大金國天聰五年孟夏吉旦立の文字は見えるが滿文は見えない。然るに金梁氏の光宣小記に言ふことに撫近門の額款は漢文大金であるが、滿文の方は却つて即ち後來通用の大清である。そこで金の國號を清と改めたのは、たゞ漢字の寫法を改へたものに過ぎず、其實滿人は金清とも同音に讀んでゐたものである。改號は漢を改めたもののゝみである。此の説當に信ず可きであるが而も所載の拓本には兩端款識の餘地無いものゝ如くである。登載のとき兩端を略去したものであるか。又磚額寫眞の方には兩端何も見えないが、この方には滿漢文の款識があるのか。抑々又別に滿文のみの額があるのか東洋史研究會宛質し度い」といふのである。金梁氏の光宣小記に言ふ意は恐らく、漢文大金に並照してある所の滿文は *ai cin* に非ずして *ai cing* であるといふことであらう。滿文中 *ay*

は音とが混淆使用される例は我が山本氏などによつても明瞭に指摘され、（東洋史研究第一卷第一號七〇頁）氏も亦この國號問題に關しては、金清二音相似説に左袒せらるゝものゝ如くである。若し金梁氏の記す所にして事實であるとするならばこゝに更に吾々は興味深い事例を提示せられたわけである。たゞ吾々は吾々の寫眞が、この滿文款識なるものを示さず、示し得なかつたことを遺憾とする。拓本寫眞の方は決して兩端を略去したものに非ず、磚額寫眞の方には實はその兩側に滿字磚額を具へてゐたのであるけれども其殆んど之を解讀し得ず、紙幅の都合もあつてこれを略去したものである。解讀することは出来ないけれども、然し、*ai cing* や *ai cin* でないことは確かである。孟氏の質問あるに會ひ、内藤先生の「滿洲寫眞帖」中、撫近門扁額寫眞などをも閲した。これには全滿文の扁額が撮影されてゐるけれども、如何にも小さくて何とあるのか

全く判讀し得ない。

事情是の如く、孟氏の質されたる處に充分にお答へし得ないことは洵に残念である。幸ひに奉天在住の士にして孟氏並びに私共のため、果して金梁氏の記すが如き事實ありや否や示教の惠を垂れ給ふあらば、洵に悦びに堪えない次第である。

本號執筆者紹介

和田 清氏 東大教授、氏の滿鮮地歴報告其他に發表せられたる幾多の名論著は學界既に周知する所贅言の要あるまい。

藤田至善氏 昭和六年、京大支那史學科卒業。支那の封建制度史・漢代史・支那史學史等を研究、現在後漢書索引の製作中。

小川裕人氏 昭和七年、京大東洋史學科卒業。女眞民族史を專攻す。金代史（世界歴史大系所收）の論著あり。

朝鮮滿洲史所載）の論著あり。

外山軍治氏 昭和八年、京大東洋史學科卒業。女眞民族史を專攻す。渤海時代（世界歴史大系所收）の論著あり。

朝鮮滿洲史所載）の論著あり。